始まりはいつも唐突で

孤狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりはいつも唐突で

【Ｎコード】

Ｎ７１８７Ｒ

【作者名】

孤狐

【あらすじ】

原作主人公に憑依？生まれ変わり？した主人公の日々を淡々と綴っています。

プロローグ（前書き）

プロローグです。

まぁ……うん。

原作前のウォーミングアップ程度に思って下さい。

プロローグ

気が付くと、知らない場所にいた。
見渡す限り……本。
棚に仕舞われた本に、全方位を囲まれて。

「おーい」

さほど広くない空間が、妙な圧迫感で更に狭く感じる。

「ねぇ」

灯りが見あたらないが、仄かに本が光って見えるのは、何か仕掛けがあるのか。

「聞こえてる？」

それにしても、だ。
出口が無いのにどうやって入ったのだろう？
秘密の入り口、馬鹿には見えない入り口。
後は……何があったか。

「無視は酷いと思うんだ」

本以外には、一人用の机と椅子、少女、脱ぎ捨てられた服、使われた食器しかわからない。

「今見たよね？バッチリ目が合ったよね？」

誰かが生活している雰囲気はあるが、あまりの有様に、思わず溜息が出る。

「うわっ。人の部屋を見てその反応は減点だよ」

「何のだ」

あ。

「そりゃあ、私の好感度……」

「……」

「……」

さて、どうやって脱出したものか。

「流石にもう誤魔化しは出来ないよ」

ジト目で見上げる少女。

仕方ないな。

「こんな所でどうしたんだ、少女よ。おとーさんとおかーさんは？」

「今気付いたようなリアクション！？」

「そーかそーか。おにーさんが探してあげよう」

「会話しようよ！？」

「よしよし。飴でもお食べなさい」
ズボンの右ポケットから取り出す。
「わーい！ありがとう。……じゃなくて！」
「コーラ味は嫌いか？なら違うのを……」
今度は左ポケットから。
「そんな問題じゃないよ！」
「なんだ、ソーダ味も嫌か。我が儘だな。ほら」
袖から別のを。
「イチゴでもないよ！というか、何でそんなに持ってるの！？」
「護身用」
「……意味がわからないよ」
崩れ落ちる少女。
勝利はいつも虚しい。
「ウガーー！！」
あ、壊れた。
頭を抱えて奇声を上げている。
忙しない奴だな。

「落ち着け」

胸ポケットから飴を取り出して口に押し込む。

「んぐっ！？……んむんむ」

「落ち着いたか？」

「ふぁい」

それは良かった。

俺のお気に入りだからな……ペロペロキャンディー。

「いやいや、どう見てもポケットに入る長さじゃないよ」

口から出してペロペロする少女。

ペロペロしながらでもツッコミを忘れない。

「とりあえず」

「ん？」

銜えながら小首を傾げる少女。

「ここから出せ」

「無理」

ペロペロペロペロ。

「出せ」

「無理」

ペロペロペロペロ。

「……」

「……」

ペロペロペロペロ。
ペロペロペロペロペロペロ。

～しばらくお待ち下さい～

「もういいか？」

「うん」

口の周りをべたべたにして見上げる。

「じっとしていろ」

「？」

ウェットティッシュで拭いてやる。
ハンカチじゃ取れないんだよな。

「……よし。それじゃあ本題に入るか」

「どうぞ」

「質問は三つ。まず一つ、ここはどこ？」

「んー……管理人室？もしくは観客席」

「説明を下さい」

「仕方ないなぁ。いい？聞いたことくらいあるよね、アカシックレコード。
世界の木の根本、全ての始まりの場所。後は……何だろ？」

いまいち分からんが、まぁいい。
何となくでも理解出来れば。

「んじゃ二つ目。帰ることは出来るのか」

「ダメ。帰る事は出来ないよ。自分でも答えは知ってたよね」

言われた通り、知っていたからか、特に落胆はしない。

「これで最後だ。いいか？」

「はい」

若干緊張した顔で見上げてくる。
期待に添うように、プレッシャーをかけてみる。

「お前の……」

「……」

ごくっ。

固唾をのむ音が聞こえた。

「名前はなんだ！」

「『　　』です！……あ」

阿呆だな。

あっさり答えてる辺りが。

「わ、わわわ忘れて！今すぐ忘れて！無し無し！！無かったことに！」

「無理」

「……だよね」

二度目の崩れ落ち。

自滅だが、やっぱり虚しい。

「無く…ない……亡く……でも……れた……縁が……切る…面倒…」

崩れたままブツブツなんか言ってる。

「それで、俺はこれからどうすれば？…実はこっちが三つ目の質問だったり」

「よし、殺ろう」

「おい『　　』」

なんだ、面倒だから殺そうって。
苦労は買ってでもしろ。

「呼んじゃった？言っちゃった？もう縁が完璧に完全に完成だよ！」

「なんかよく分からんが、おめでとうと言ってみる」

「もう……どうでもいいよ」

三度目は無かったか。
少し残念な気が……しないな。

「えっと、これからだったね。あなたにはここに行ってもらうよ」

渡されたのは、すごく分厚い本。
表紙も中も真っ白で、内容が全くない。

「どうやって？」

「そりゃあ……力ずくで。こう、頭から本へグリグリ押し込んだら」

地面に置いた本へ逆立ちしろと。
追加オプションで少女が側に。

「どんな変態だよ」

「まぁまぁ。一回だけだから」
その一回が致命的だ。
というか
「立ってやっちゃダメなのか？」
「……あ、そうすればいいんだ！」
手を叩いて頷く少女。
気付けや。
「だって、今まで誰も文句言わなかったんだよ」
素直すぎる人たちだ。
尊敬出来る素直さだ。
「『見知らぬ少女に、そんな事言われるなんて！』って言いながら喜々としてやってた」
変態すぎる人たちだ。
軽蔑出来る変態さだ。
「これでいいのか？」
頭に本を乗せてみる。
「うん、大丈夫だよ。後は……」
なにやら探し物をする少女。

広くない部屋だから、すぐに見つかるだろう。
「じゃじゃーん！ピコピコハンマー！！これで叩いたら完了だよ」
得意げにピコハンを掲げる。
そうか、逆立ちした後で、少女に叩かれるのか。
「どんな罰ゲームだ」
「あれ？嬉しくない？」
「欠片も」
「むー。今までの人は『やったぜ！これでイケる！！』なんて言いながらスピンしたのに」
「終わってるな。…ほんの興味だが、今まで来た人の数は？」
「えーと……あなたでちょうど７０人だよ」
６９人はそれをやったのか。
「そんな期待した目で見られても俺はやらん」
「残念。まぁ無理強いをする事じゃないよね」
本当に残念そうな顔でピコハンを振りかぶる。
心なしか、段々と大きくなってるような。
「いっくよー！」

「待て」

「なんで？後は叩くだけなのに」

「それはなんだ？」

少女の持っているピコハン。
周りに当たらないギリギリのサイズのだが。

「ピコピコハンマー！ちょっと大きくなったけど」

「ちょっとで危険サイズにならない。小さいままじゃ出来ないのか？」

「だって……届かない」

そんな理由で怪我をしたくない。

「座るから戻せ」

少女の前で胡座をする。
頭に本を乗せ、少女の前に座って、ピコハンで叩かれる。
やっぱりおかしい。

「最後に一言いいか？」

「いいよ」

いつでも叩ける体勢の少女に一言。

「せめて服を着ろ」

少女は全裸だった。
会ったときから全裸。
飴を食べる時も全裸。
今も全裸。

「……～～～～！！！」

悲鳴に近い叫びを聞いた後、頭に衝撃が走るのを感じて、意識を失った。

プロローグ（後書き）

次回から原作……に入りたいと思います。

感想、指摘、誤字、ほかにも有りましたらどうぞ。

中傷は受け付けません。メンタルが弱いので。

第一話（前書き）

第一話です。
いろいろご都合っぽくなりますが……
あたたかい長い目で見て下さい。

第一話

月日が流れるのは早い。
光陰矢の如しとは、よく言ったものだ。

あの少女に叩かれ第二の人生を歩み出して、今や高校生。
前世では味わえない、なかなかスリルある人生だった。
道に迷って知らない場所に行った事も数知れず。
地元を離れ、国を離れ、星を離れ、世界を離れたりも。

そんな過去を送ったのだから、少しくらい休んでもいいと思うんだ。

今日は平日。
朝には元気に登校する児童の声が聞こえ、大人たちが仕事へ向かう。
そんな中、俺は布団で睡眠体勢。
さっき見た時計は、いつもは起きている時間だった。
つらつらと夢へ行く意識で最後を思う。
お休みなさい。

「お兄ちゃん！！なんでまだ寝てるの！？」

ドアが激しく開け放たれた。
寝ぼけた視線だけそちらへ送る。

「ほら、さっさと支度しないと遅刻するでしょ！」

「なんだ、美柑」

我が家の妹さんじゃないか。

「なんだ、じゃない！ほんとに時間危ないから！」

「ダメだ。後7時間は寝なければ」

「い・い・か・ら！起きなさい！！ほら、布団からも出る！」

掛け布団がはぎ取られる。
あぁ～俺のオアシス～
手だけを彷徨わせて温もりを求める。

「全くもう。ほら着替えて…ってきゃあ！？」

掴んだ温もりを抱え込む。
抱き枕ってあんまり使ったこと無いけど、これは寝れそうだ。

「～～～～～っ！？」

暴れるな暴れるな。
俺の睡眠の犠牲になってくれ。
さっきより強く抱きしめる

「っ！？……」

動かなくなってしまった。
窒息とかしてないよな？
薄目を開けて顔を覗き見る。

「……」

真っ赤な顔の美柑と目が合った。
少し潤んだ瞳が可愛らしい。

「ま、まだ昼間…。で、でもどうしてもって言うなら仕方ないけど」

「素直に起きますので、それ以上顔を近づけるのは勘弁して下さい」

いやいや、兄妹で朝のキスってどうなんだ？
しかも１５歳と１１歳が。

「ほら、着替えるから」

ドアの方を指さして、退室を促す。

「む～！」

「むくれるな。時間が無いんだろ」

背中を押して追い出す。
伸びをしながら深呼吸。

「よし！」

ベッドにダイブ。

「お休みなさい」

割とある朝の一コマ。

「死ね！」

朝、ご飯代わりに飴を食べながらダッシュで登校。
午前中は睡眠学習。
あっという間に昼休み。
美柑お手製弁当をつつきながら、猿に今朝の事を話す。
そのときの返答がこれ。

「口に物を入れてしゃべるな」

「そんなことはどうでもいいんだよ！！」

「お前に礼儀を教えてやる」

頭を掴んで握る。
所謂、アイアンクロー。

「ちょ、いてっ、いてててててて！？」

「分かったか？」

「すんませんでした！」

「分かればよし」

手を離したら崩れ落ちた。
根性の足らんエロザルだ。
「リトくん、あんまりいじめちゃダメだよ！」
めっ！
と人差し指を向けられる。
「いや春菜、言っても分からん奴にはこれくらいしないと」
「でもやりすぎはダメ」
また指を向けられた。
「春菜ー、猿山には何言ってもわかんないんだから」
「そうだよ、おにいちゃんの方が正しいよ」
春菜の背後からリサとミオが登場。
「もう〜。二人とも……」
仕方ないと言いたげな顔だ。
「そんなことよりも、三人はもう弁当食べたのか？」
「私たち、さっきまで先生に呼ばれてたから」
「今から食べるよ」

「おにいちゃんと一緒に！」
猿山を退けて座る春菜たち。
「なぁミオ、いい加減におにいちゃんはやめないか？」
「え～。おにいちゃんはおにいちゃんだよ？」
「同世代におにいちゃんはどうなんだよ」
「ぶ～～！」
「リトが諦めなよ」
「ミオも意外と頑固だから、リトくんが引くしかないよ？」
「でもなぁ……」
「じゃあリトくんはなんて呼ばれたいの？」
「普通に名前では……」
「ダメ！」
両手で×をしながらの反対。
「ならお兄様は？」
「残念ながらリサ、それは使用済みだ」

「そっちの方がビックリ！？」

「なら…兄上？」

「春菜……いつの時代だ」

「やっぱりおにいちゃんがしっくりくるよ！」

そんなこんなで昼休みは終了。

猿山はずっとダウン。

第一話（後書き）

原作のほんのちょっと前になりました。
呼び方については、まぁその内書く過去話にでも……。

第二話（前書き）

原作の話途中になりますが……
すみません。

あと、美柑の精神年齢が若干低いと思って下さい。

第二話

「ただいま」

昼からはいつも通りに過ごして帰宅。
三人娘はそれぞれ部活やアルバイトで、放課後に別れた。
しっかし、ミオの呼び方は変わらないな。
懐かれていると思って受け入れるべきなのか？

「おかえり、お兄ちゃん。お父さん、今日も帰り遅くなるんだって」

「おーう」

相変わらず締め切りギリギリなのか、親父は。
また、暇見つけて手伝いに行こう。

「そうだ美柑、今日は一緒にご飯作るか」

「ほんとに！？」

「あぁ、いつも弁当作ってもらってるからな。それに久しぶりだろ？」

「うん！」

随分と嬉しそうな顔しちゃって。
家族サービスが足りてなかったのか？
これからは気をつけよう。

「先に風呂入ってくる」

「いってらっしゃい」

「ふぅ」

あー。

一日の疲れが取れる。

風呂は人生の洗濯。

これが無ければ明日を迎えられない。

「晩飯…何作ろう」

確か、冷蔵庫の中には……。

近いうちに買い物行かないと。

美柑を連れて商店街回ってみるのもいいな。

さっき、家族サービスが足りてないと反省したばかりだ、好きな物買ってあげよう。

「んあ？」

家の風呂に泡が出る機能は無かったはず。

なのにボコボコ泡が出ている。
なんか、見たことがあるような気が……。
いつだったか。
中学の時？もうちょっと前だったような……。
小学生の頃……風呂場で……。
あぁ、思い出した

爆音

風呂のお湯がこぼれていく。
勿体ない。

「んーーっ。脱出成功っ！」

「ララと会ったときか」

「あ、リトだーっ！」

ララ・サタリン・デビルーク
銀河系を統べるデビルーク星の第一王女…だったはず。
小学校高学年の時のことだから、あんまり覚えてない。
いろいろ慌ただしかったし。

「久しぶりだな」

「ほんとだね！いきなり帰っちゃうんだもん」

「お前の発明品の失敗で、だ」

「でも、また会えてよかった！」

抱きついてくるララ。
そんなに広くない浴槽がいっぱいだ。
「何で来たんだ？」
「え？そりゃあ……えーと」
「家出」
「うっ！？……あたり」
相変わらずのバカ親みたいだ。
あれだけ変なことはするなと言い聞かせたのに。
「お兄ちゃんっ！？さっき…の音……は…」
美柑が風呂場に飛び込んできた。
なんで服を脱ぎかけなんだよ。
「美柑は始めましてだな。こいつはララ。宇宙人だ」
「よろしくね！」
「……」
「美柑？」
「？」

無反応は寂しいな。
俯いてて表情が伺えない。

「「？」」

ララと顔を見合わせて首を傾げる。
こいつが分かるワケないよな。

「えへへぇ〜〜」

頭をなでてみる。
おぉ！サラサラで、良い感じの撫で心地。

「……こ」

「こ」

「こ？」

「この泥棒猫っ！！！」

風呂場に美柑の叫びが響いた。
……テレビ以外で初めて聞いたよ、そのセリフ。

「お兄ちゃんから離れて！！」

「えっ、ちょっ、まって！？」

「早く離れてよ！」

「美柑、落ち着け」
「でもっ！！」
「とりあえず、リビングに移ろう」
風呂場は狭い。

「で？貴女はお兄ちゃんと、どういう関係なの？」
体を拭いて服を着、リビングに移動。
ララは服が無いので、バスタオルを巻いている。
んで、着いた第一声が美柑。
いつもより数段低い美柑の声は、ちょっとした恐怖を感じてしまう。

「私とリトは～…」
ララは全く気にもしていない。
図太いのか、ノーテンキなバカなのか。
……後者だな。
「将来を誓い合った仲だよ！」
煽るのがお上手で。
「そんな！？」

「一方的な、が抜けている」
俺から言ったことは…たぶん無い。
勢いとか、流れとかで言ってしまった気もする。
「よかった。お兄ちゃんにそんな人がいるわけ無いよね」
ホッと、胸をなで下ろす美柑。
若干失礼な発言だ。
……事実だが。
「え～！？『三人とも俺が貰ってやるぜー！』って言ってくれたのに」
「お兄ちゃんはそんなこと言わない！ていうか、三人って誰！？」
こちらに火の粉が。
あ～何かの発明品で喋ったような、喋ってないような。
「三人ってのはだな、こいつとその」
「ララ様ー！」
白い物体が乱入。
どっから…あぁ、窓開けっ放しじゃ無いか。
「ペケ！良かった、無事に脱出できたんだ！」
「ハイ！地球と聞いて、すぐにリト様の家を探しましたよ」

「わー！流石ペケだね！」
再会を喜ぶ二人。……一人と一体。
「お兄ちゃん。なんか変なのが…」
側に寄ってきた美柑から、警戒したような声が。
「あれは、ララが造った『万能コスチュームロボット』。まぁ、動くタンス程度の認識でいい」
「んぅ。お兄ちゃんがそう言うなら」
頭を撫でながら説明。
おぉ！美柑もララに引けをとらない撫で心地……知ってたけど。
「じゃあペケ、よろしくー」
「了解！」
タオルを投げ捨て、ペケを発動。
便利だよな、ペケ。
服代かからないし、着替える必要ないし。
「じゃーん！！」
いつものドレスらしい物に早変わり。
恥ずかしくないのだろうか、あの服は。
「かわいー！そんな服にもなるんだ！」

「他にもいろんなのがあるよ！どう？リト。似合ってる？」

「ああ、似合ってるよ」

似合ってるには似合ってる。
でも、町中を歩けなさそうなのはいただけない。
美柑とファッション話をしだしたララを見て、不安になる。
あいつ、地球のこと、全然分かってないんじゃ？

「時にララ様。これからどうなさるおつもりで？」

「え？パパに言って、リトの家に住めるようにしてもらうよ？」

いつ決まったんだ。

お、侵入者。
やっぱり窓は閉めておかないと。

「…全く。困ったお方だ。地球を出るまでは手足を縛ってでも、あなたの自由を封じておくべきだった」

困った奴の所は同意。
自分勝手なのは遺伝なのか？

「お兄ちゃん、また変な人たちが……」

こいつら、美柑を怖がらせやがって。
あのバカには、またお仕置きしないと。

「おい、部下AとB。いろいろ言いたいことはあるが、まず一つ」
「なんだ、地球人」
「邪魔するならば……」
「お兄ちゃん？」
部下の教育ぐらいちゃんとしろよ。
バカ親よりは、ちょっとまともなんだから。
五十歩と百歩、差が無いようでも、意外とあるもんだ。
「人様の家に土足で上がるな」
近寄って殴る。
窓から部下二人を追い出す。
あーあ、リビングが砂まみれ。
「この地球人が！！」
「まさか……。おい、まて！あの方は…」
キレた部下Aがまた入ってくる。
人の話を聞かん連中だ。
「靴を脱げと」
アッパーで体を浮かせ。
「言っている」

腹に回し蹴りをたたき込む。
庭へ逆戻り。
のびちゃってるよ、部下A。

「……大変、ご無礼をいたしました！」

部下Bが、綺麗な直角で頭を下げる。
思い出してもらえてなにより。

第二話（後書き）

深くは気にせずにして貰うと僥倖。
軽く受け止めてほしいです。

第三話（前書き）

深くは考えないで、サラッと読んで下さい。

第三話

「おっはよう！リト！」

「ララさん！お兄ちゃんとなんで一緒に寝てるのっ！しかも裸！？」

おはようございます。
美柑とララの掛け合いを目覚ましに、随分と余裕のある時間に起床。

昨日、あれからバカ親に連絡。
ララを家出ではなく、研修？で地球に来ていることに。
何かゴチャゴチャ言ってたが黙殺した。
結果、家に居候することに。

「あー、おはよう」

「お兄ちゃんからも言ってよ、服くらい着てって」

「えー？だってー……」

「とりあえず、部屋から出てくれ。着替える」

見られながら着替える趣味はない。

「私も？」

「真っ先にお前が出るべきだ」

兄妹ならまだ……いや、ダメだな。

「ほら、ララさん。お兄ちゃんの邪魔しない」
「…はーい。ペケー、行くよー」
「ハイ！」
ペケは素直だな。
ララもペケの3、いや、5分の1でも見習ってくれれば……。
過ぎた願いなのだろうか。

「「いただきます」」
「いっただきまーす！」
鮭と卵焼きとみそ汁、それとご飯。
実に日本人らしい。
美柑も腕が上がってきたなぁ。
負けないようにレパートリーを増やそう。
「おいしー！美柑って料理上手なんだね！」

「ありがと。でも、お兄ちゃんの方が上手だよ」

「そうか？この卵焼きとか、負けてる気がするぞ」

俺のは、味付けで多少の下手さをカバーしてるだけ。
こんなに綺麗に焼けない。

「へぇー。リトって料理上手だったんだぁ」

「あれ？ララさんとお兄ちゃんは知り合いなんじゃないの？」

「ん？…ああ。こいつと会ったのは小学校の高学年。料理を覚えだした頃だったな」

道に迷って、気付いたら知らない森の中。
我ながら、どうやって星を越えたのやら。

「リトの手料理食べてみたい！」

元気よく挙手するララ。

「いつか、な。美柑が作ってくれるし、なかなか機会が無いんだ」

「そういえば、昨日は一緒に晩ご飯作る約束だったのに…」

ララとペケが来たり、部下ＡＢが乗り込んできたり。
掃除やバカ親に連絡などの後始末が終わったときには、夜も更けてた。
疲れた俺たちは、そのまま就寝。

「そう落ち込むな。そうだな…今夜辺りにでもしよう」
「約束だよ！何があってもだから！絶対に！！」
「おう」
気迫が凄まじい。
深刻なまでに家族サービスが足りてなかったんだな。
「今晩、リトのご飯食べれるの！？」
「ああ。だからってワケじゃないが、大人しく待ってろよ？」
「もっちろん！」
「ならよし。美柑、帰りに食材買って帰ろうか」
「うん！…って、時間が！？」
走るほどではないが、ゆっくりするほどでもない。
急いでご飯を食べる。
「「ごちそうさま」」
「おそまつさまです」

「いってきまーす！」

「いってきます」

「いってらっしゃーい！」

久しぶりの、誰かに見送られながらの出発。
返事が返ってくるってのは良いな。

「じゃあ美柑、また放課後に」

「わかってるよ。じゃあね」

美柑と別れて、一人寂しく登校。
誤魔化しに飴を取り出す。
少し早歩きになってしまうのは、仕方ない。
今日の献立を考えながら進む。
昨日の通りに、美柑の好きなのでいくべきか。

「お？」

「あっ」

「おはよう」

「おはよう、リトくん」

春菜がこんな時間にいるなんて珍しい。

「どうしたんだ？」

「うん、ちょっと…」

言いにくいことなのか？
目を合わせようとしない。

「…昨日、犬の散歩でリトくんの家の近くに行ったの」

「ああ」

「それでね、黒い服を着た男の人たちが入っていくのが見えたから、
大丈夫かな…って」

目撃されてんじゃねえよ。
大雑把すぎだ、部下ＡＢ。

「心配ご無用。あいつらは、まぁ知り合いみたいなもんだ」

「リトーーーー！！！」

「こいつの」

空から降ってきたお姫様、ララを指さしながら言う。
家に帰ったら、一般常識を教えなければ。

「……どちら様？」

「私？私はララ・サタリン・デビルーク。ララでいいよ！」

「私は…西連寺春菜です」
「じゃあ春菜って呼ぶね！」
春菜が尻尾や飛んでたことに触れないで助かった。
説明するのも、どうしたらいいか分からん。
「…あの、ララさんとリトくんの関係って？」
「私とリト？」
「うん」
「リトはね、婚約者だよ！！」
「こん、やくしゃ？」
「そう！！」
自信満々に胸を張るララ。
大事なところが抜けている
「ララの自称だ」
「むーー。いいもーん！すぐになるんだから！」
「なーんだ」
ほっと胸をなで下ろす春菜。
昨日の美柑と似たようなリアクションだな。

「で、ララはどうしてここに？」
「そうだった！お弁当を届けようと…」
「そのお弁当は？」
「え？……置いてきちゃった」
目に見えて落ち込むララ。
相変わらず、行動が空回り。
「ありがとな。その気持ちは嬉しい」
「でもっ！」
「一日くらい昼飯抜いたって大丈夫だ」
「……せっかく役に立てると思ったのに」
「次に期待してるよ。っと、そろそろほんとに時間が危ない」
腕時計を見てみる。
走ればまだ間に合う。
「本当！？急がなきゃ！」
「ララ、お弁当は好きにしていいからな。残すのも勿体ない」
言うだけ言って、春菜の手を取って走り出す。

「リ、リトくん！？」

「言い分は、無事に着いたら聞いてやる」

結果としては、ギリギリだったが間に合った。

第三話（後書き）

全然話が進まない…。
後何話で一巻が終わるんだろうか。

第四話（前書き）

間が空いてしまった…まだ原作2日目……
少しずつ進めていきます。

第四話

ただ今昼休み。
学生が午後への活力を補う時間。
そんな時に俺は、

「あ〜〜……」

たれていた。
今日に限って、教師たちが指名してくる。
普段は寝ているのに、珍しく起きていたから…だとさ。
別に、気持ちを切り替えて真面目になろうなんて思ってない。
今後のララについて考えてただけ。
ララが来たって事は、その周辺の人が来ることに…。
考えただけで頭痛が…。

「おいリト！」

「あ？」

「スッゲーかわいー女の子が、おめーの事探してんぞ！！」

「……」

頭痛の種がやってきた。

「キミかわいいねー。演劇部？」

「オ…オレらが、そのリトっての探すの手伝ってやるよ」

早速絡まれやがって。

通行人が見ている方向に走れば、あっさりと。

あんな目立つドレス？で来るからだ。

「その必要はない」

「リト！！」

駆け寄って抱きついてくるララ。

柔らかい感触と堅い感触。

「これ！持ってきた…！？」

あんなに思いっきり抱きついたら、ぐちゃぐちゃになってるだろうな…お弁当。

わざわざ家に帰って持ってきてくれたのか。

「ありがとな」

今にも泣きそうなララの頭を撫でる。

本当に良い撫で心地。

「…うん！」

嬉しそうにはにかむララ。

これから起こることを忘れさせてくれそうな癒し。

「お、おいリト。誰だよ、そのコ！」
野次馬代表の猿。
どうやって誤魔化そう。
ヘタなこと言ったら面倒になる、絶対。
「私？私はリトのお嫁さんでーす！」
抱きつきながら、楽しげに宣言。
「なにーーーーっ！！？」
ヘタなこと言ったなぁ。
ララにそういうのを期待する事が駄目、無駄。
「リト…お前…春菜ちゃんや里紗ちゃん、未央ちゃんだけでは飽きたらず…」
人聞きの悪い。
そんなことだから、いつまでたっても人間になれないんのだ。
「こいつの自称だ。俺は納得していない」
「そんな！？リト、私を貰ってくれるって言ってくれたのに…」
あれはウソだったの？
そう言って、悲しげな顔をするララ。
野次馬のボルテージが上がっていく。

「そいつを捕まえろーーーっ！！」

うぜぇ。

暑苦しい男に寄られても嬉しくない。

「逃げる…のはムリそうだな」

「？」

首をかしげるお姫様を後ろにさがらせる。

気が重い。

溜息で気持ちを切り替える。

「来い、野郎共。返り討ちだ」

「と、いうことがあったんだ」

「へぇ～」

「怪我はしないでね」

「やっぱりおにいちゃんは強かったんだ！」

あの後、野郎共を片っ端から倒していった。
教師がなんか言っていたが、校長を買しゅ…説得して無罪に。
ララは色々と問題があるから帰らせた。

「それで男子が廊下で積み重なってたんだ」

もぐもぐと弁当をつつくリサが、思い出し笑いをしながら言う。
通行の邪魔だからとすぐに片づけられたが、なかなかな出来だった。

「ミオ？やっぱりって、リトくんがケンカしてるところ見たことあるの？」

「うん！私のアルバイト先でちょっとね～」

ね？と見られても、あんまり思い出したくない。
あれ以来、ミオのバイト先には行きにくいし。

「リトくんって、そんなにケンカしてたの？」

「んぐ！？……あー…その…」

「高校に入ったら、妹ちゃんの為にやらないつもりだったんだよな」

「これ以上心配をかけるのは…って、おにいちゃんがいってたよ」

「な、なんで二人がそんなこと知ってるの！？」

「なんでって…な？」

「遊んだ時に同じ質問をしたからだよ」

確かそのときは、春菜は用事があっていなかった…ような気が。

「リトくん！！」

「…ああ」

「他には無いの！二人には話してることは！」

「いや、無い……と思う」

その日、たくさん質問があって、あんまり覚えてない。
記憶に残っている中では、春菜も知っている答えばかり。

「あれ？リト、本当の事を言わないと」

リサがしなだれかかってくる。

「おにいちゃん、あの夜を忘れちゃったんだ」

ミオも逆から寄ってきた。
……周りの目が痛いんだが。

「本当…あの夜……リトくんの不潔！！」

いきなり何を言いやがりますか。
ほら、周りの視線が更に厳しくなった。

「まったくわからんが、春菜の思っている事は誤解だ」

「ご、五回も！？」

「…すまん、リサミオ。後は任せた」

顔を真っ赤にして、言葉が通じなくなってしまった。
お手上げになり弁当に逃げる。

「ほらほら、春菜も落ち着いて」

「そうだよ。別におにいちゃんと寝」

「ミオストップ！」

いつも道理の、騒がしい昼休み。
これから更に騒々しくなるんだろうと、ちょっとした現実逃避。

第四話（後書き）

毎度ながら全然進みません。
広い心でご容赦ください。

第五話（前書き）

物語の中間みたいなものです。
サラッと読んでください。

第五話

「お兄ちゃん！」

「おー美柑」

放課後、校門の前で美柑が待っていた。
小学生が高校に一人で来るとは、度胸のある妹だ。
変態に見つかったら危ないぞ。
この学校には変態が多い、筆頭は校長。

「変な人に声をかけられなかったか？」

「んー……。無駄に歯を光らせる人と、抱きつこうとした太った人に…」

弄光と校長だな。
小学生相手になにしてんだよ。

「よく無事だったな、そんな二人に絡まれて」

「お兄ちゃんの妹ですって言ったら、走って逃げ出したよ」

校長はわかるが、弄光は全く心当たりがないんだが。
…まぁいい。

「そうか。それじゃあ行こうか」

「うん！」

手をつないで歩き出す。
嬉しそうな美柑を見ると、家族のふれあいの少なさを痛感した。
家にあんまりいない両親の分まで頑張ろう。

「なぁ、美柑さんや」

「ん？お兄ちゃんどうしたの？」

「あー…。いや、その服も似合ってるぞ」

「ありがと！ほかにもねぇ…」

六回目にもなると、誉める言葉が月並みになってきた。
それでも喜んでくれる美柑に癒される。

「んー。これもいいけど、こっちも…」

「決まらないのか？」

「うん。…これかな。でもこっちの方が…」

服を前に、腕を組んで考え込む美柑。
…よし。

「迷ってるのはそれで全部か。なら大丈夫だな」
「え？ちょっと、お兄ちゃん！？」
「ほら、さっさと行くぞ」
服をレジまで持って行く。
我が儘を言わない美柑のことだ、一着に決まるまで悩むだろう。
買わないで帰るかもしれない。
「ありがとうございました」
店員に見送られて店を出る。
予想より荷物が増えたが、まだ許容範囲。
「さて、次はどこ行くか…」
「お兄ちゃん」
「どうした？行きたい場所でもあるのか？」
「ううん。……よかったの？記念日でもないのにあんなに買っちゃって」
戸惑いながら、申し訳なさそうに聞いてくる。
…もっと欲を出してもいいと思うんだが。
「日頃の感謝だと思って受け取ってくれ」
「でも…」

「まぁまぁ。あれでも食べよう」
たい焼き屋を指さして無理矢理な話題変換。
妹が兄に気をつかってんじゃねぇよ。
「…ありがと」
「おう」

「ただいまー」
「ただいま」
「おかえり！」
ドタバタと音を立てながら、ララが突っ込んできた。
いつも元気だよな、お前は。
ついでに頭を撫でまわす。
「…お兄ちゃん」
袖を美柑に引っ張られた。
「ん」
頭を差し出す美柑も撫でる。

ずいぶんと幸せそうな顔。

「ララ、これから晩飯の準備だ」

「リトの手料理？」

「ああ。だから大人しく待ってろよ」

「うん！あ、ゲームやっててい？」

「待っているならな。じゃあ美柑、取りかかろうか」

「まかせて！」

久しぶりになるが、腕は鈍ってないだろう。

「おいしい！ほんとにリトって料理上手なんだ！」

次々と胃に収めていくララ。

よく噛んで、しっかり味わえ。

「むぅ。相変わらずおいしい」

対照的に、じっくりと噛み締める美柑。

そんなに差があるとは思えないが……いつ追い越されるだろう。
「そんな難しい顔して食べるなよ。始めて数年に負けたら流石にショックだ」
「でも、母さんは…」
「あれは無し。それに、あれには美柑も関係してるだろ」
母さんも悪かったんだよ。
でも、俺が追い出したみたいで、ちょっとは罪悪感を覚えてる。
「何の話？母さんって、リトと美柑の？」
「実はね、お兄ちゃんが…」
「美柑、これ上手く出来たと思うから食べてくれ」
「んぐ！？」
しゃべられる前に口封じ。
適当に箸で掴んだ料理を美柑に食べさせる。
「ずるーい！リト、私には？」
「わかったわかった。どれが食べたい？」
「えーとねぇ…」
「お兄ちゃん、私ももう一回！」

「はいはい」

親鳥がヒナにエサをやる気分を味わう。

……親鳥って飯食えないのか？

「お兄ちゃんにもやってあげる。はい、あーん」

「リト！私のもあーん！」

「なぁ、出来ればバラバラに食べたいんだが」

味の違う二つは不味いと思うぞ。

「ならこれは？」

「これなら大丈夫でしょ？」

「そうだな。大丈夫だから、そんなに迫ってくるなムグ！」

しゃべってる途中に入れるのは危ない。

そう学んだ晩飯だった。

第五話（後書き）

次回に新しい登場人物が出ます。
まぁ原作の流れなので、あの人で間違いないのですが。

第六話（前書き）

ザスティンが出るのは先になってしまった。
今回は……ノリで書きました。

第六話

「リトー、お風呂空いたよー」

「わかったから、せめて服を着ろ。タオルぐらい巻け」

「えー！夫婦になるんなら、当たり前じゃないの？」

「承認してない。後、俺は恥じらいを持っている子が好みだ」

「みーかーーん！！タオルどこーーーーー！！！」

嘘も方便。

俺は特に好みを持ってない。

ララが恥じらいを持つのは、ずいぶん先になりそうだ。

「済まなかったな、ちょっと騒がしくて」

『いえ、そんなことはありません。ララ様がお楽しそうで、私は大変嬉しいです』

「そう言ってくれると助かる」

『とんでもない！地球に来られる前は、いつもつまらなそうにしておられたララ様が…』

「泣くなって。それで…あのバカは？」

『それなんですが…』

「どうした？歯切れが悪いな」

『言いにくいのですけど…』

「ああ」

『……来ます』

「…どこに？」

『地球です』

「……」

あいつは…。
まぁ、直接会って言いたいこともある。
ララ達のことや、部下のこと、仕事のことも、他には……。
思いつく限り言ってやる。

『あの…』

「ああ、悪い。バカのことで考えてた」

『その…私たちはどうすれば？』

「そうだな…。しばらくは船で待機していてくれ」

バカが来るなら、いてくれた方が少しは気が楽。
宇宙人関係の問題も起こるかもしれない、いや、絶対起こる。

俺の勘が確信している。

『わかりました。なにかありましたらご連絡下さい』

「頼りにしてるぞ」

『はっ！』

切れた電話を戻す。

…よし。

がんばれよ、未来の俺。

今の俺は現実から逃げだしたい。

「お兄ちゃん、誰との電話だったの？」

アイスを銜えた美柑が、ひょっこりと現れた。

電話が終わるのを待ってたのか。

「ララの父親の部下。情報交換だ」

「ふーん。あ、お兄ちゃん」

「なんだ？」

「あの、ね……その…」

アイスを両手で持って、恥ずかしげに視線を彷徨わせる美柑。

…アイスが溶けるぞ。

「お兄ちゃん！」

「おう」

意を決した、真剣な視線が向けられる。
…アイス、垂れてきてる。

「いいいっしょに、お、お風呂に、入ろう…？」

さっきよりも顔を真っ赤して、だんだんと窄みながらも視線は外さない。
昨日は乗り込もうとしてたのにな。
…熱でアイスが危ない。

「そうだな、入ろうか」

「ほ、本当？」

「本当。だから、アイスを助けてやれ」

「え？…ああ！？」

「あーあ、ここに付いてるぞ」

美柑の腕まで垂れていたアイスを舐めとる。
うん、夏にはやっぱり冷たい物が一番。
俺も風呂上がりに食べよう。

「おおおお兄ちゃん！？」

「風呂行くんだろ？先に入ってる」

更に赤くなりすぎて、湯気が出そうだ。
倒れないだろうな。

「あー…」

浴槽で手足を伸ばして、体が癒されていく。
暑い日でも、熱い風呂はホッとする。

「お兄ちゃん、入るよ？」

ぼー…としてると、タオルを巻いた美柑が入ってきた。
まだ少し顔が赤い。

「ほら、立ってないで美柑も浸かろう」

「う、うん…」

おずおずと美柑が浸かっていく。
……真正面から抱きつくように。

「なぁ、美柑。この体制は…」

「……ダメ、かな？」

流石に、ちょっと戸惑われる。

でも…。

「特別だ」

今日は家族サービスのための日。
我が儘くらいきいてやる。

「…いつもなら、断るのに」

「今日はそういう日だ」

「なら…」

「…美柑さん？お顔が近いです」

「お兄ちゃん……」

「やべぇ。顔が動かない」

両手でがっちりと掴んで固定。
言った手前、無理矢理ほどく訳にもいかない。

「そうだ、言うことがあったんだ」

赤くなっている顔を近づけたまま、美柑が止まった。
こんな状況で何を言うつもりだ。

「お兄ちゃん」

「はい」

一拍おいて一言。

「いただきます」

「あれ？リト、美柑どうかしたの？」

「限界を越えたんだろ」

「どういうこと？」

「私に聞かれましても…」

現在美柑は、ソファに伏してぴくりとも動かない。
風呂から上がって、すぐに倒れ込んだ。
始めは手足をバタバタさせていたが、もう力尽きてしまった。

「美柑は俺がやっとくから、ララはもう寝なさい」

「はーい！おやすみ！」

「おやすみ」
寝る前なのにテンションの高い。
お淑やかなララってのも違和感があるか。
「さて」
ララが上がるのを見送った後、美柑に向き直る。
「おーい、美柑さん。いつまでそうしてんだ」
「……」
無反応。
よっぽど応えたらしい。
…仕方ない。
「よっ」
「ひゃ！？」
強制連行といきますか。
ひっくり返して持ち上げる。
お姫様抱っこっていうんだっけ？
「こらこら。暴れると落ちる」
無言でジタバタ暴れるな。
抱えたまま、美柑の部屋まで連れて行く。
階段になると諦めたのか、赤い顔をそらして大人しくなった。

「着いたぞ。ベットまで運ぶか？」

「大丈夫…」

「そうか。ならおやすみなさい」

「…おやすみなさい」

逃げるように部屋に消えていった。
明日には戻ってるだろう。

第六話（後書き）

美柑のヒロイン度が高い…。
次回は春菜になります。
……ララの回はいつになるんだろう？

第七話（前書き）

更新がかなり遅れてしまいました。
早く出来るよう頑張ります。

第七話

「んむぅ……？」

「あっ、起きちゃった」

朝、何かが動く気配で目が覚めた。
大体の予想はついている。
寝起きの頭でもすぐに答えが出てくるぐらいには。

「で？」

「ん？」

「朝っぱらから寝込みを襲いに来たのか？」

「うん！！」

朝日が眩しい太陽と同じくらいの笑顔。
元気なのはいいことだ。

「ララ、今何時だ？」

「えーと……四時だよ」

……おやすみなさい。

「寝たらダメ！」

いやだ。
布団を頭まで被って断固拒否。
今頭を働かしたら眠気が去っていく。

「リートー！」

「うる…さい」

布団に引きずり込んで拘束、美柑にもやったなぁ。
このお姫様、力が強いから布団が破れてしまう。

「ララ」

「な、なに？」

「お休みなさい」

「…おやすみ？」

良くできました、と頭をなでる。
照れくさそうに赤くなるララに眠気が後押しされた。
二度寝するぐらいの贅沢は味わってもいいんじゃないかな。
たとえ俺の勘が、これから先は面倒になると断言していても。

「ねぇ、お兄ちゃん」

「…はい」

現在、ララとベッドの上で正座。

「どうしてララさんが一緒に寝てるの？」

「それは…」

「リトが引きずり込んん！？」

ややこしくなる前に、ララの口を塞ぐ。

……しかし、美柑の視線が痛い。

誤魔化せるとは思ってなかったが、失敗か。

「へー。そうだったんだ……」

「美柑？」

「大丈夫、だよ。私は…怒って、なんか……っ！」

言葉とは裏腹に、今にも髪の毛が天を衝きそう。

「ほら、深呼吸だ。一旦落ち着こう」

「…そうだよね」

深呼吸を繰り返すたびに、目に見えて落ち着いていく。

「ふぅ…」

「落ち着いたか？」
「うん。それで……なんでお兄ちゃんとララさんが一緒に寝てたの？」
「ララの……夜這い？」
「日が昇ってたから、朝這いかな？」
「どっちでもいいよ！…つまりは、ララさんが原因なんだ」
ビシッとララを指さす美柑。
人に指を向けてはいけません、なんて軽くツッコミを入れられそうにない。
俺が入った方が、経験上色々と面倒になる可能性が高い。
というわけで、面倒にならないうちに退避。
「夫婦なんだから……！！」
「それなら兄妹の方が……！！」
廊下に出ても聞こえてくる喧騒を無視して朝の支度。
今日の朝ご飯は何にしようか……
「お兄ちゃん！！」
「リト！！」
「あーあー。何も聞こえない」

耳を手で塞ぐ。
そんなことしても意味がないのは分かっているが、やることに意味があるんだと思う。
「そんな子どもみたいなことしてないで、ララさんに言ってよ」
「リトは私と寝たいよね？」
「あ～～。ほら、今はそんなことしてる時間は無い」
思っているより時間が過ぎるのが速い。
早く学校へ行かなければ。
確か今日は日直当番だったはず。
「う～…」
「むくれるなって。帰ったら聞いてやるから」
「……わかった」
よしよしと頭を撫でる。
照れた笑顔を浮かべながら準備しに部屋へ向かっていった。
…ララ、そんなに物欲しそうな顔しても時間がない。
「……」
「ララも着替えて準備しろよ？」
「じーーー」

口で言っちゃってるよ、このお姫様。

「……」

「じーーー」

「ララ？」

「…じー」

……だんだん涙目に。

流石に不憫というか、罪悪感が…。

「わかったわかった」

おいでと手招きすると、喜色満面で飛びかかって来た。

「よーしよし」

「えへへ～～～」

ついつい構い倒してしまい、ララが恍惚としたところで終了。

復活したララはすぐに飛び立っていった。

なんか用事があるんだろう。

「で、だ」

ララが来るまでは二人だった、いつも道理の朝食。
今日は、ちょっとだけいつもと違っていた。

「どうしたの？」

「いや、珍しいなぁ…と」

一昨日までは向かい合って食べていたのだが、今は隣同士で座っている。

「そんな日もあるよ」

「そうなのか？」

「そうなんだよ」

「そうなのか」

丸め込まれてしまった。

「はい、あーん」

「あーん」

「次は何がいい？」

「ご飯が食べたい」

「あーん」

「あむ」

「……ところで美柑」

「うん？」

「…いや。次は何がいい？」

食べさせるぐらい、そんなに悩む事じゃないだろう。

「お兄ちゃんにもやってあげるよ。何から食べる？」

「米」

「あーん」

食べ終わったら、また走って行かないと……。

「んで、遅れた訳だ。このシスコン」

「妹思いと言ってくれ。それか家族思い」

「美柑ちゃんが……かな？」
「兄思いの妹を持って嬉しい限りだ」
「おにいちゃん、一般的には無いよ」
「なっ！？」
カルチャーショック。
放課後、三人娘に朝の一コマを話したら孤立無援になってしまった。
「それより」
「あ、話題変えた」
「うるさいリサ。それより、さっさと仕事終わらそう」
「うん」
「じゃあ日誌書いてくれ。俺は……花の水替えかな」
なんとなく目についた花瓶。
変えて損もしないし、気になったからな。
「リトもマメだねぇ」
「クラスで水替えやってる男子って、おにいちゃん位じゃない？」
「…中学の時もよくしてたね」

中学か……。
忙しくてあんまり学校に行ってなかったな。
変な知り合いが増えだした時だし。
流石に、星を巡ってますなんて学校に言えなかったが。

「あれ～春菜ぁ」

「おにいちゃんのこと、そんな時から見てたの？」

からかうネタを目敏く見つけ出した二人。
仲裁に入るのも藪蛇になりそうなので聞こえないふり。

「そ、そういう訳じゃ…」

「なら、どういう訳なのかなぁ？」

「それは…その…」

「ほらほら、言っちゃいなよ」

「たまたま、偶然見ただけで…」

「へぇ～たまたま…ねぇ？」

「偶然で、『よく』なんて…ねぇ？」

「あ、うー……」

赤くなってオーバーヒート寸前の春菜。

「ストーップ。そこまでが限界だ」
「ちぇ。もう少しで…」
「うんうん。惜しかったね」
「〜〜〜！…私ゴミ捨ててくる！！」
顔を耳まで赤くしたまま、ゴミ箱を掴んで走り出す。
そんなに慌てると……
「あっ」
「っと。危ないだろ？」
自分の足に引っかかって転けそうになるとは思わなかった。
ドジだなぁと思いながら、倒れる前に回り込んで受け止める。
「あ、ありがとう」
「どういたしまして。落ち着いてやろうな？」
「…うん」
まぁ、怪我をしなくて良かった。
俯いた春菜の頭を、つい撫でてしまった。
「いつまで二人は抱き合ってるの！」
「おにいちゃん、離れよう？」

「あ、ああ。春菜、ゴミを集めないと」

「……」

無反応？

俯いて顔が見えないが、赤い耳は見えている。

「あ～…リト、箒持ってきて」

「春菜は？」

「おにいちゃん、今はそっとしといてあげて」

よくわからんが、言われた通りにロッカーに向かう。

「はぁ。幸せそうな顔しちゃって」

「悪く言えば、だらしない顔だけどね」

「…羨ましい」

「ホントに」

後ろからの会話は聞こえなかった。

その後、再起動した春菜と仕事を終わらせ下校。

リサに今度の休み買い物に付き合えと言われたり、ミオにはバイトに来いと誘いのような命令が。

二人の機嫌が治るならお安いご用。

他愛もない話を分かれ道まで喋り合った。

第八話（前書き）

今回は間話です。
よく言えば布石。悪く言えば無駄話。
獣成分が欲しくなったので…。

第八話

「ただいま」

「おっかえりー！」

玄関のドアを開けた途端、飼い主にじゃれつく犬。
いや、ララの事なんだが。
なんか…犬っぽい。

「どう思う？美柑」

「おかえり、お兄ちゃん。…なんでララさんに犬耳付けてるの？」

「似合うと思って」

ポケットから取り出した犬耳を付けてみた。
この尻尾ってどうやって付けるんだろ？

「確かに……似合ってるね」

「えへへ～」

「良かったなララ。ほら、お手」

「ワン」

「おかわり」

「ワン！」

「……おぉ」

改めてララの純粋さを思い知った。
ここまで素直にやるとは……撫でてあげよう。

「よしよし、良くできました」

「クゥ～ン」

「食後のデザートを追加しよう」

「ワン！」

「先に行って、夕飯の準備をしてきてくれるか？」

「！」

たたたー、とボールを追いかける犬みたいに走り去って行くララ。
あ、犬耳取ってない。

「いいなぁ…」

「美柑？」

「…ちょっと羨ましい」

犬耳を付けられて、犬の真似事をやらされるのが？
美柑も難しい年頃になってきたってことか。

「なら、美柑にはこれをプレゼント」
制服のポケットから取り出した物を、美柑の頭に装着。
「これって……」
「そう……猫耳だ」
黒い猫耳。
宇宙規模で研究を重ね、ついに完成した逸品。
手触りはもちろん、感情によって動く。
ついでに言うと、ララの犬耳も。
尻尾はどっちも付け方が分からない。
「お兄ちゃんって、猫好きだよね」
「犬か猫、どっちかっていうとな」
好きと大好きの差。
「猫ってどんなことするの？」
「招き猫みたいなポーズがメジャーじゃないか？」
軽く握った手を顔の横に持ってきて、にゃー。
「にゃ、にゃー」
「おぉ。かわいいぞ」

「にゃ～あ」

ついつい撫で回してしまうほどに。

「ごろごろー」

「にゃあ～」

本当の猫なら喉が鳴っていそうな美柑。
ごろごろごろごろ～。

「っと。そろそろご飯作るか」

「にゃ～～……」

「正気に戻ったか？」

「……にゃ」

「にゃー」

猫の真似をする美柑の真似をしてみる。

「にゃ～～～～～～！！」

はやー。
赤くなって部屋に駆け込む美柑を見送り、手に持った尻尾を見つめる。
これも動くらしいけど、ホントにどうやって付けるんだろ？

付けた奴は一人しか知らないし、今度聞いてみるか。

「「「いただきます」」」

さっきの騒ぎも落ち着き、穏やかな夕食。
ララは気に入ったのか、犬耳を付けたまま。
機嫌良さそうにピコピコ動く犬耳が和む。
美柑は部屋に置いてきたらしい……もったいない。

「そういえば、ララ」

「んむ？」

「うちの学校の制服着てるんだな」

…帰ってきたときから気付いていたけど。
『研修で地球に行くのなら学校には通わせろ』
馬鹿親が出した数少ない条件の一つ。
面倒な手続きはコネと買収で押し通した。
それに……あの校長がそんな細かい事を気にするわけ無い。

「どう？リト。似合う？似合う？」

「よく似合ってるよ」

ピコピコピコピコとよく動く犬耳。
にへら～と笑うララの頭の上で忙しない。
……すごく和む。

「お兄ちゃんと一緒の学校……」

「羨ましそうな視線を送るな。年齢を誤魔化すのは難しいんだよ」

「…出来ないって言わないのがお兄ちゃんらしいね」

「リトって何でも出来るんだね～」

「買い被りすぎ。俺にも出来ないことだって……ある」

出来ないこと、出来ないこと……。

「むぅ…」

何だろう？

「ら、ララさんは明日から学校に行くの？」

「う、うん！そうなんだよ」

うわ、無理矢理な話題転換。

「へ、へぇ～。なら転校ってことになってるの？」

「ああ、設定上は。バレるまでの間だけど」

バレたらバラす。
宇宙人でも地底人でも未来人でも異邦人でも何でも、気にする奴は放っておけばいい。
胸を張っていれば、周りが慣れる。

「勉強とかって大丈夫なの？」

「だいじょーぶ！頑張って覚えるから」

「こんなのでも、宇宙では天才で知られているんだ」

「…ララさんって、すごかったんだ」

随分とショックを受けた顔をしてるぞ。
普段のララからは想像し難いのは分かるが。
今も、犬耳付けた変わった女の子に見えているし。

「美柑どうしたの？」

「ララは頭がいいな～って」

内心を悟られないように、いつもより強めに撫で回す。
…こんな締まりのない笑顔のララを、全宇宙が血眼になって探しているんだからな。
ララの発明を軍事目的で使ったら、一年以内に地球以外の星を消せるだろう。
馬鹿親には厳しめに言っておいたのに……人に口には戸が立てられないってことか。
次に会ったら……。

第九話

「おはよう」

「おはよー、リト」

「あ、おにいちゃん。おはよー！」

「おはよう、リトくん。今日は早いんだ」

「雪が降るかもね」

「きっと槍が降ってくるよ」

「二人とも、気持ちはわかるけど言っちゃダメだよ」

「…言ってくれるな。そんなに珍しいか？」

「そりゃあ…ね？」

「去年はおにいちゃんいつもギリギリだったよ」

「うん。私も覚えてる中では数回しかなかった」

「……ヘルメット用意しておこう」

自分でも珍しく思うが、走らずに登校。

今日から通うララを職員室まで送り、近くにいた校長と話し合い。

快くララを迎え入れてくれた。

鼻息荒くフラに近づいたときは、つい口よりも先に手が出てしまったが。

「そんなことより。リト、ホントに今度の休み空いてるの？」

「あぁ、大丈夫だって」

「そう言って、急用が出来るんだよねぇ」

過去に裏付けられた言葉は耳に痛い。

実際に、急用が入って帰った事が何回も。

「むぅ～。じゃあバイトはいつ来てくれるの？」

「んー。来週はどうだ？」

「来週、ってシフト入ってない！？…うぅ、誰か代わってくれるかな？」

「ムリに入れなくても、一緒に客で行けばいいだろ」

「一緒……その方が牽制になるよね」

「どうした？」

「おにいちゃん！一緒に行こうね！！」

「あ、あぁ」

落ち込んで俯いたと思ったら、勢いよく詰め寄ってくる。

ミオらしい感情に素直な行動は、時々わからない。
「ね、ねぇ、三人とも。何の話をしてるの？」
置いてけぼりになっていた春菜が、妙に暗いオーラを出しながら参加。
「何の話って、休みに出かけようか」
「デートの約束をしてたんだよ」
「デートの約束を……じゃないな。リサ、デートではない」
「なんで？男女が一緒に出かけるのはデートでしょ」
「そう…なのか？」
「世間一般ではデートになるね。だから私ともデートだよ！」
「なるほど。…春菜、デートの約束をしてたんだ」
「そんな！？」
バックに雷が落ちてそうなほどショックを受けた様子。
なんでだ？デートなんて初めてじゃないだろ。
「おーい、春菜？…完全に固まってる」
「よっぽどショックだったんだよ」

「言葉が違うだけで、結構出かけてるよな？」

「それに気付かないのが春菜だよね」

「…おにいちゃんも気付いてなかったのは、私もショックだけど」

「…私も落ち込んできた」

リサミオも沈みだした。

周りに助けを求めても、男子からは殺意の視線が俺へと、女子からは羨望の視線が三人へ。

差し違えても…、爆発しろよ！、いいなぁデート、じゃあ私もデート？、など好き勝手に言っている。

とても当てには出来そうにない。

……仕方ないか。

「ほら、戻ってこい。じゃないと、この写真を…」

懐から取り出したるは、なんの変哲もないただの手帳。

そこに挟まっている三枚の写真。

「わーーー！リトくん待って！！」

「戻った！戻ったから！！」

「だからそれだけは勘弁してよ！」

「冗談だ。他の人に見せる訳がないだろ」

俺も写っているから見せられる訳がない、が正しい。

大げさなくらいほっとしてる三人に、少し悪いことをしたかと思えてくる。
罪悪感を払うため、つい美柑にするように頭をなでなで。
「ほら、席に着きなさい。ホームルーム始めます」
いろいろやっている間に、お爺ちゃん先生が来ていた。
三人娘は、早足で席に戻って行く。
「えーー。突然ですが、転校生を紹介します」
全員が席に着いたのを確認すると、そう切り出す。
「入ってきなさい、君」
「ハーイ！！」
手前のドアから、明るい返事とともに入ってくるのは…。
「やっほーーーリトーー！！同じクラスだね！」
予想道理のララ。
Vサインをしながら、得意げに笑っている。
ひらひらと手を振り返すと、教室内の視線が痛かった。
「へぇー。じゃあ、ララちぃはお姫様で」

「宇宙人で」

「リトくんの家に住んでるんだ」

「うん！」

昼休み、いつもの四人＋ララでお昼ご飯。
会話を聞いてわかるように、あっさりとバレた。
目敏いリサとミオがララの地球発言に気付き、質問攻めを開始。
出身は？家族は？住んでる場所は？転校した理由は？俺との関係は？とか。
素直すぎるララは、全部の質問に回答。
デビルーク星、王様の父と綺麗な母と可愛い妹が二人、結城家、研修、夫婦。

「リトくん、ララさんと夫婦って……」

「前にも言ったが、ララの独り言だ」

「絶対になるんだから！」

俺が惚れるか、ララが諦めるまで続くだろう。
あと、他に好きなやつが出来ても。

「新たなライバル出現！！」

「かなりの強敵だよ！」

「…なんか嬉しそうだな」

「私としては共有もありだけど、やっぱり戦わないと」

「独り占め出来なくても、一番になりたいからね」

「リサ、ミオ…。うん！私も頑張ろう！！」

「私も負けないよ！」

……疎外感。

でも、楽しそうならそれでいいか。

第十話

「リトー！」

放課後、挨拶が終わってすぐにララが向かってきた。

「ガッコ、案内して？」

子供のように、キラキラと輝く瞳。
溢れ出ている好奇心が、より一層子供っぽい。

「ララ、残念だが予定が入った。他の誰かに……」

「え〜〜〜！」

むくれるララの頭に手を置きながら、周りを見渡す。
男子はもちろんあり得ない。
鼻息荒く、虎視眈々と狙っている阿呆共に任せられるか。
まともな所に連れて行かないだろう。
女子は数人だけ。
春菜、リサ、ミオ。
他にもいるが、筆頭はこの三人。

「春菜、頼めるか？」

「うん、大丈夫。それに、学級委員だから」

学級委員の仕事に、転校生の学校案内は入って無いだろううに。
真面目なのか優しいのか……両方だな。

「じゃあ早く行こう！いってきまーす！！

「ら、ララさん！そんなに引っ張ったら…きゃっ！？」

「気をつけていってらっしゃい」

わかったー、と春菜を引きずるように走り出すララ。

…春菜、がんばれ。

「ねぇ～リト～？」

「なんで私たちの方を見なかったのかな～？」

後ろからリサミオがのしかかってきた。

「深い意味はない。あえて言うなら日頃の行いだ」

場をかき回すリサ、悪乗りするミオ、二人を止める春菜。

十中八九、春菜を選ぶだろう。

「そりゃあ、良いとは言えないけどさ…。少しは迷ってくれたって……」

「そうだよね…。こんなにおにいちゃんを思ってるのに！」

「こんなに愛してるのに！」

背後から突然の告白。

だが、まぁ…

「そういう台詞は、笑いを堪えながら言うものじゃない。昨日のドラマか？」

「あったりー！もう少しリアクションしろよ～」

「反応薄い！…ていうか、おにいちゃんも見てたんだ」

「美柑に付き合わされてな」

主人公を巡って、義妹と女友達が争う修羅場ドラマ。
昨日の内容は、主人公が二人以外の人を好きになるという、どうしようもない話。
美柑に悪影響がないか心配しながら、結局は全部見てしまった。

「っと。そろそろ行ってくる。二人とも早く帰れよ」

「わかってるって。いってらっしゃい」

「いってらっしゃ～い！」

軽く手を振り返して、目的の場所へ。

「ここは化学部」

「へーーっ」

ちょっと強引に連れて行かれたけど、素直に聞いてくれる様子にホッとした。

ララさん、転校生としてやってきたリトくんの知り合い。

宇宙人でお姫様で自称らしいけど婚約者の同居人……同居…一つ屋根の下。

ちょっと……すごく羨ましい。

寝起きのリト君とか家事をしてるリト君とかお風呂上がりのリト君とか他にも……。

「春菜？どうしたの？」

「う、ううん！何でもないの！」

「そっか。ねぇ、春菜。他にどんな所があるの？」

「まだ行ってないところは……校庭の方かな」

今の時間は部活してるから、ララさんも興味あるよね。

…でも、リトくんが帰宅部だから入らないかな？

家庭の事情でできないのはわかるけど、一緒に部活したかったなぁ。

部活が無い日ぐらいしか一緒に帰れないし、一緒でも二人っきりはあんまりないんだよね。

遊びに行くのも基本は四人だから。

この前は四人で、その前は三人でだった。

誘ってみようにも、今度の休みはリサとデー…出かけるからダメで、その次はミオと……。

あれ？私って、リトくんとふたりで出かけたの数えるくらいしかない！？

…強くでられない自分恨めしい。

「春菜〜？」

「は、はい？」

「ガッコって楽しいね。同じ場所に集まってみんなでワイワイやって！リトが前に教えてくれたんだけど、実際に来てみて良かったよ！」

楽しくって仕方ないって書いてありそうな笑顔。
それがあまりに似合っていて、少し笑ってしまう。

「ふふっ。なら、これからもっと楽しくなるよ」

「ほんと！」

「ええ。まだまだイベントがあるから」

修学旅行、学園祭、体育祭、他にもたくさん。

「そっかぁ…。楽しみだなぁ」

「で？」

「な、何でしょうか結城さん」

「いや、なぜ敬語なんだ、弄光」

バッターボックスに立ち、ピッチャーである弄光を見る。
いかにも緊張してますって顔で冷や汗を流してるな。

「なんでこんな勝負をしたんだ？」

「それは、その…勢いといいますか、つい…」

「勢いやついで彼女になって貰うのか？」

「いえ、そんなことは…」

ララも面倒な事をしてくれたものだ。
なんでも、遊び心で野球部の練習に入り、弄光の投げたボールを一
（ララ本人にとっては）軽く打ったら彼女になれと言われが、それ
を即答で断ったら一球勝負しろだとか。
でも、これ以上目立つのはまずいとペケが止めた所、偶々通りかか
った俺に代打を任命。

「とりあえず、さっさと投げろ。まだ仕事があるんだ」

「はい！」

表情が堅いまま振りかぶって、全力の投球。
いつも軽い奴だが、野球は本気でやっているらしい。
なかなかの速さの球だが、

「よっと」

全力ではないが、それでも場外に飛んでいく白球。
弾道にいた弄光をはね飛ばしたような気がしたが、勝負は終わったんだから気にしない。

「さっすがリトーー！」

飛びついてきたララを受け止める。
この大きなお子様は、何処にいても騒ぎを起こすらしい。
後ろで春菜が苦笑してるぞ。

「ララ、あんまり羽目を外し過ぎるなよ」

ふにゃっとした頬を左右に引っ張って言い聞かす。
引っ張られながらも嬉しそうなララには効果が期待できそうにないか。

「全部回ったか？」

「ふぁふぁふぁふぉ」

まだだよ。
たぶんそう言ったんだろう。
面白い顔になってきたところで手を離す。

「春菜、また頼むな」

「うん。部活見終わったら帰るけど、リトくんは？」

「俺はまだ掛かりそうだ。悪いな、誘って貰ったのに。じゃあ」
「いってらっしゃーい！」
「がんばってね」
「おう」
走ってさっさと作業に戻ろう。
気分転換の散歩だったんだが、時間が掛かってしまった。

「ねぇ、春菜」
テニスコートへの移動中、リトくんと会ってから静かだったララさんが聞いてきた。
「なに？ララさん」
「リトって、何してるの？」
「さ、さぁ？」
また誰かの手伝いでもしてるのかな。
自分から首をつっこむんじゃなくて、周りから頼られてるみたいだから。

役員の手伝いにいって特別顧問になってきたことがあったり、校長の仕事を代わりにやって代理になったこともあったから、リサミオと次は何になってくるか笑い合ったことも。
どこかの国のトップになったりなんて言ってたけど、宇宙一になるとは思わないよね。

「ララさん、ここが女子テニス部です。私やリサとミオが入ってるの」

「へぇ〜〜〜」

珍しそうにきょろきょろしてるのが微笑ましい。

「やぁ、西園寺くん」

「こんにちは、佐清先生。今、転入生のララさんに部活を案内してるんです」

「ほう。…ようこそ、テニス部へ」

「……」

無反応というか、興味が無いララさん。
先生を見ないで、落ちているボールを見るぐらい。

「他も回りますから、もう行きますね」

「ああ。そうだね。…フフ」

「それでは」

いつもと雰囲気が違うような気がして、早く離れたかった。
その後は他を回って解散。
結局、部活に入る気は無いみたい。
リトくんと一緒にいたいから。
笑顔で言い切れるララさんが、すこし眩しかった。
……私が言ったら、リトくんは受け止めてくれるかな。

第十一話

「ただいまー」

「おっかえりーー！」

玄関の扉を開けた瞬間、ピンク色が突進してきた。
避けるわけにもいかなく真正面から受け止めると、嬉しそうににやけている顔が。
腰にまで回ったララの手が外れそうになく、抱きつかせたままリビングへ。
キッチンでは、エプロン姿の美柑がすでに夕食の準備をしていた。
鼻歌を機嫌良さそうに歌いながらテキパキと作っている姿は、若すぎるが主婦のように見えてくる。

「あっ、お兄ちゃんお帰りー。もうすぐ出来るから着替えてきてね」

「おう。ただいま」

「美柑、今日の晩ご飯は？」

「トンカツとしじみのみそ汁だよ。ララさんもお兄ちゃんに抱きついてないで手伝って」

「はーい！」

素直に手伝いに行くララ。
身長や年齢は逆なのに親子みたいな二人が微笑ましい。

「ん〜〜〜！おいしーー！」

「ふふ。そう言ってくれると作った甲斐があるよ。ね？お兄ちゃん」

「ああ、今日もおいしいよ」

「…それだけ？」

がっかりしたと目で語りながら聞き返してくるが、生憎と何を言って欲しいのかわからない。

隣に座っているララを見ても、おいしそうに食べていて会話すら聞いてないご様子。

「どのようにお答えすれば？」

「毎日このみそ汁を僕のために作ってくれ。…とか？」

「…それ、あのドラマの台詞だろ」

その台詞を彼女に言った後、主人公は包丁を持った義妹に襲われてた。

女友達にも知られたら襲われていたし。

「一回だけでいいから…ね？」

「……毎日このみそ汁を俺のために作ってくれ」

妹にフリとはいえプロポーズする兄。
……フリなら問題ない。

「ねぇ、リト」

「ん？」

「さっきのって、どういう意味？」

地球の、日本独特の言い回しは宇宙のお姫様にわからないらしい。

「ララさん、あれは所謂プロポーズなんだよ」

「へぇ～…。リトー」

「断る」

「ぶー。まだ何も言ってないのに」

言わなくてもわかることもあるんだよ。

「…いいもーん。その代わり、一緒にお風呂に入って貰うから！」

「ダメー！！」

美柑がテーブルを叩いて立ち上がる。
被害が無いように食器を退かしておこう。

「お兄ちゃんとお風呂に入っていいのは家族の私だけ！」

「家族になるんだからいいの！」

「それなら私が入る！」

「美柑はこの前入ってたからダメ！」

あれ、ララ知ってたんだ。
食後のお茶で一息つきながら、観客気分で傍観。
当事者を置いてきぼりで盛り上がってるし。

「「うーーー！！」」

睨み合いになった両者。
今にもキャットファイトになりそうな雰囲気。
そろそろ止めるか。

「二人とも、あんまり長引くなら先に入ってくるからな」

「ら、ララさん！」

「わ、わかってるよ美柑！」

いざとなったら、たとえ敵でも協力する潔さ。
いや、原動力が欲望なら潔くはないのか？

「あと、風呂が狭いから、三人ってのは無しだ」

「うっ！」

「…考えてたのか」
美柑らしい妥協案だが、あの風呂では入れない。
「しつもーん！」
「ん？」
「お風呂が狭いから、三人で入れないんだよね？」
「ああ」
「なら、三人で入れる広さがあればいいの？」
「……ああ」
「へぇ…」
掛かったな、と言わんばかりにララが似合わない黒い笑みを浮かべている。
「ちょっと待ってて」
パタパタと二階へ上がっていった。
…早まったかもしれない。

「じゃじゃーん！ひろびろバスタイムくん！！」

本当にちょっとで帰ってきたララが持っていたのは、球体のメカ。
名前からして、空間を広げるんだろう。

「三人で入れる広さならいいんだよね？」

「…わかったわかった。三人で入ろう」

嬉しそうに「「いえーい！」」とハイタッチをしている二人。
風呂のためにそんなに頑張れるか…。

「ほら、風呂の準備してこい」

「うん！お兄ちゃん、先に入ってもいいけど、出たらダメだからね」

「絶対だよ！」

「わかってるって」

繰り返し念を押してくるほど、俺は信用ないのか。
まぁ、広い風呂に入れるなら何でもいいや。

「「おおー」」

浴室に入った途端、つい兄妹そろって感嘆の声を上げてしまった。
見慣れた我が家の風呂が、驚くほど広がっている。
「どう？これなら問題ないよね？」
「そうだな。三人では余裕すぎる位だ。すごいなララ」
「うんうん！ララさんすごーい！！」
今回は失敗しているところも無さそう。
ララを誉めちぎるのも仕方ない。
「さて、さっさと体を洗ってしまおう」
「あ、リト？その、あ、洗って欲しいなー、と…」
断られるだろうと思っているのか、歯切れが悪い。
変なところで遠慮するやつだな。
「……いいよ。ほら、椅子に座れ。美柑も洗ってやるから」
「…ホントに？髪だけとかなしだよ？」
「ホントに」
「珍しい…。お兄ちゃんがいつもより優しくなるなんて」
「うん。いつもなら、絶対に断ってるよね」
「たまにはな。今は溢れんばかりの優しさを持っている」

久しぶりの広い風呂で、テンションが上がってるんだ。
最近は、温泉や銭湯に行ってなかったからな。

「目、瞑ってろよ」

「うん」

まずはララから。
長い髪を、なるべく丁寧に洗っていく。

「ふふ」

「どうした？笑い出して」

「人に洗ってもらうのって気持ちいいね」

「それは良かった。どこかかゆいところは？」

「んーん。だいじょーぶだよー」

ララがとろけてきたから、そろそろ終了かな。

「流すぞ。ちゃんと目を閉じてるか？」

「ん」

ざばー、と頭からお湯をかけると、艶が増した綺麗な髪に。
さぁ、次だ。

「お兄ちゃん、こっちも」
ララほどでないが、長めの美柑の髪を洗う。
「どうだ？」
「ん～。気持ちいいよ。久しぶりかな？お兄ちゃんに洗ってもらうの」
「そういえばそうだな。一緒に入るのはあったのに」
たぶん、数年前になるんじゃないか？
美柑が一人で入りだしてからは、自分で洗うようになってたし。
「よし。流すぞー」
「うん」
さっきと一緒で、頭からお湯をざばー。
綺麗になった髪を見て、満足げな気持ちになってくる。
「次は…」
「私たちでリトを洗ってあげる！」
「お兄ちゃんも座って」
「いや、俺は…」
「いいからいいから。リトは座っててね」

「任せてよ。ほら、目を閉じてー」
お湯をかけられると、そのまま美柑に頭を洗われる。
…確かに、人にやって貰うと気持ちいいかもしれない。
「じゃあ、私は体を洗う！」
目を閉じていてわからないが、ララが前に立っている気配はする。
少しずつ距離が近づいて……。
「ララ」
「なに？」
「タオルならそこに置いてあるハズだが？」
「えー。これなら私も洗えて、いっせきにちょーだよ」
「…そうだよね。なら、私は背中も洗おうかな」
椅子に座りながら、前後から挟まれる。
…二人がいいなら、別にいいか。
「あ、リト。ちょっと立って」
「…そのまま続けるのか？」
「「もちろん」」

……洗われました。

第十二話

「おーい！こっち回せー！」

「結城には絶対に回すなよ！！」

「マーク増やせ！」

ただ今、体育の授業中。

男子はサッカー、女子は１００メートル走。

「……暑苦しい」

日差しが強くなりだした今日この頃。

周りを野郎に囲まれ、自軍のゴール前で待機。

暑苦しくて仕方ないが、体育教師から攻めるなと悲願されたので、

仕方なく守りに。

まぁ、自分から動き回ろうとは思わないんだが。

「結城、そっち行ったぞ！」

余所見をしていると、敵が攻めてきていた。

というか、相手はマークに人数割いてるのに…。

「結城リトーーー！！！」

喧しい奴が来てしまったもんだ。

「いつもいつも綺麗どころを集めやがって！！今ここで引導を渡し

てくりぇ！？」

「うるさい」

周りのマークを抜いて、特攻猿野郎からボールを奪い取る。

「っと。ほら」

軽く、ボールが割れない強さでゴールへシュート。
わざわざカーブまでかけたボールは、ネットへ突き刺さる。

「あーーくっそ！また入れられた！！！」

「おい猿。５点入れたらおごってくれるんだよな」

「へいへい。何をおごりましょうか」

「商店街のたい焼き。昼休みが終わるまでに」

「ちょっ！？この鬼！悪魔！外道！フラグメーカー！！」

疲れているだろうに、喚きながらボールを追いかけに行く猿。
……ボールが来るまで待ってるか。

「いちについてー。よーい」

パーン！、とピストルがなった瞬間、ララさんがすごい速さで走り出した。
と、思ったらゴール。
「……は、速すぎて、わからなかった」
測定係の子が計れないのも無理無いよ。
本当にあっという間だったから。
「すっごーい！流石宇宙人！」
「宇宙人ってみんなこんななの？」
「世界一だね！」
１００メートルを世界記録なんて目じゃないくらいのタイムで走りきったララさん。
…やっぱり宇宙人なんだね。
「おー！ララちぃすごーい！」
「おにいちゃんといい勝負じゃない？」
「あれ、リサミオ。リトくん見に行ってたんじゃなかったの？」
この前のサッカーで活躍していたリトくんを見逃したから、今度は！って言ってたのに。
「あー…。それがさ……」

「ゴール前から動くなって、センセーにおにいちゃん言われたんだって」

前回の活躍を見れば仕方ない、かな？

「それでもゴール決めてたけどな」

「たぶん、どこからでも決めちゃうね！」

サッカーの方を見てみると、遠目でも分かる人の固まり。
攻めてきた猿山くんからリトくんがあっさりとボールを取っているところ。
それをパスした後は、空を見上げて動かない。

「…やる気、無いね」

「「うん」」

キーンコーンカーン

「お！やっと授業終わったか」

「もうお腹ペコペコだよ～」

「二人とも早く片付けてリトくんとご飯食べよう」

今日のお弁当のおかずはいつもより手間をかけたから、リトくんも美味しいって言ってくれるはず。
……それでも、リトくんや美柑ちゃんには敵わないんだけどね。

「はぁ…」

「どうした？いきなりため息ついて」

「幸せが逃げていくよ？」

「ちょっと、ある兄妹の料理の腕がすごく良いなって……」

女の子としては好きな人にご飯を作ってあげたいけど、好きな人の方が料理が上手だと自信なくすよ…。
釣り合わないんじゃないかなって思えてきて。

「確かに落ち込んでくるけど、おにいちゃんは気にしてないと思うよ？」

「そうだけど…」

「それに、リサなんて前に失敗した料理をおにいちゃんに食べさせたんだから！」

「ちょっと！何で知ってんの！？」

きゃー！なんて言いながら逃げ回るミオを追いかけるリサ。
…初耳。

「なんで隠してたの？」

「そのあと～、おにいちゃんに二人っきりでわっぷ！？」

「言わなくていいから！」

「んーんー！」

あのリサがミオを止めてまで言いたくない事……すっごく気になる。
リトくんが関係してることなら尚更。

「ほらミオ、私が抑えてる間に！」

「春菜！？待った待った！」

「ぷはっ。春菜って、おにいちゃんが絡むとおかしくなるよね」

「そんなことはいいから、早く教えて！」

「はいはい。リサはねぇ、おにいちゃんに二人っきりで料理を教えてもらってるんだってー」

「二人っきり……」

「し・か・も、出来た料理をおにいちゃんに『あーん』までしてもらってるんだよね！」

「『あーん』」

「な…あ…うあ…」

耳まで真っ赤になりながらパクパク口を動かすだけのリサ。
へー、私知らなかったなー。

「締まってる！すっごく締まってる！リサが危ないから！？」

「え？あわわ！？ごめんねリサ！」

「けほっけほっ。大丈夫大丈夫。っていうかミオ！何で知ってんの！」

「何でって…おにいちゃんに聞いたら素直に答えてくれたよ。リサと何してるの？って」

「あー…」

リトくんらしいけど、もうちょっと乙女心を…。
でも、ライバルがこれ以上増えるのは困っちゃうし。

「フフ、フフフフ……」

突然笑い出したリサからすぐに離れる。
今までの経験上、こういう時は即刻退避。

「リサさん？その笑い方は流石に引いてしまいますよ？」

「うるさーーい！！人の幸せを暴いた報いを受けろーーー！」

「きゃーーーーーー！？」

あ、みんな集まってるから行かないと。
それにしても、リトくんと二人っきりでお料理かぁ…。
恥ずかしいけど、新婚さんみたいでいいなぁ。
……よし、今日は特訓しよう！
そのためには、帰りに材料を買わないと。

まだ騒いでる二人を置いて、少し足早に歩く。
何を作ろうかなぁ～。

第十三話

「リトー。一緒にご飯食べよ！！」

昼休み、お弁当を抱えたララが現れた。

「おう。そこら辺の席借りてこい」

「あ、おにいちゃん、私たちも一緒に食べるよ。ほら、リサも」

「わかってるけど……」

いつものメンバーが集まってきたが、リサはなんで落ち込んでるんだ？

三時間目まではいつも通りだったのに。

「リサ、どうしたの？」

「体調でも悪いのか？」

「あー、二人とも、今はそっとしといてあげて。一時的なものだから」

ミオがそう言うなら大丈夫なんだろうけど……。

ふむ。

「ひゃあ！？」

「あ、冷たかったか？ならすまん」

「そんなことはないけど…って近い近い！」
「いや、顔が赤くなってきたから。頬も熱いし」
リサの頬にあてた手から、だんだんと熱くなっているのがよくわかる。
ほんとに大丈夫なのか？
「う～～～！」
「こらこらララちぃ、落ち着いて」
「だってぇ～」
「ここは我慢して、後でお願いした方が…」
「…！　わかったよミオ！」
後ろで何か言っているけど気にしない。
下手に触れればどうなるか何度も経験した。
「そういえば春菜は？」
いつもはそろそろ止めに入ってくるのに、教室には見あたらない。
「春菜なら、さっき佐清先生と一緒に部室の方へ歩いていくの見たよ」
見渡して探していると、親切なクラスメートが教えてくれた。

部活関係の用事だろう。
っと、ケータイが震えだした。
「すまん。ちょっと席外す。遅かったら先に食べてていいから」
「頼まれ事？がんばってねー」
「い、いってらっしゃい…」
「いってらっしゃーい！」
三人に見送られながら廊下へ。
昼飯、食えないかもしれないな。
「もしもし」
「こんにちは、結城リト君」
「佐清？なんの用だよ」
「おや、よく声だけでわかったね。でも、そんなことはどうでもいいんだ」
「用件は？」
佐清とは、電話で話すほどの仲じゃないと思っていたんだが。
他の教師と同じで用事を頼まれる事はあるが、それ以外は接点が少ない。
「デビルーク星の姫君の事で話がある…。今すぐ会えるかな…。断

ったら君の大切な彼女が大変な事に…」

…なるほど。

「ああ、わかった。すぐに行く」

「待ってるよ」

来ることがわかっていた面倒事がやってきた。
溜め息をついて、逃げた幸せを逃さないために深呼吸。
重い足でいつもより少し早く歩いて部室へ向かった。

そんなことがあった五分後。

「おい、言い残す事はあるか？」

「……」

「黙るな。喋れ」

「あ…り……ま…せ……ん…」

謎の宇宙人との死闘……なんてのはなかった。
結構はやく行動した割に、期待はずれもいいとこだ。
最初に遭った婚約者候補だから、少しだけ、ほんの少しだけ期待し

ていたのに。
部室に着いたらドアを蹴り破って入り、さっさと縛られていた人質の春菜を救出。
春菜を抱えたまま、迫ってきた佐清を蹴り上げる。
そのまま落とさないように蹴って蹴って蹴りまくっていると本性らしい小さい姿になったが、それでも追加で蹴る。
最後に踵落としでトドメをさすと終了。

「他に仲間は？」

「…いま…せん」

わざわざ探す手間がなくなったし、ザスティンにでも届けておくか。
ポケットから紐を取り出して縛り付ける。
後は連絡入れておけば持っていってくれるだろう。
さて、抱えたままの春菜を保健室に運ばないと。

で、春菜をベッドに寝かして保険の先生とお話。

「つまり、眠り姫を理由に授業をサボった訳ね」

「あーあー、聞こえません」

「子供っぽい真似をするなら、せめて表情をつけなさい。無表情は変よ」

「以後気をつける」
だからその手の掛かる子供を見る目をやめろ。
頭をなでようとするな。
「避けなくてもいいじゃない。あなたと私の中でしょ？」
「中じゃなくて仲だ。どんな中だよ」
「それは……」
「頬を赤らめるな。服をはだけるな。近寄ってくるな」
「もう、注文が多いのね。それとも、そういうプレイかしら？」
「未来永劫あり得ない」
「わかったわ……ノーマルがいいのね？さあ、まぐわいましょう」
「ちょっとそこに座れ桃色思考」
いつからこんな風になったんだ。
最初は……2時間ぐらいまともだった。
「これでいいかしら？」
「ああ、それで首輪をしてなかったら完璧だ」
どっから取り出した。

さっきまで付けてなかっただろ。
「はい、リードよ」
「いらん」
「つれないご主人様ね」
「…あぁ、そう」
疲れる。
久しぶりの再会だってのに。
なんでこんなにテンション高いんだよ。
「……ほんと、つれないわね」
伏し目がちで呟く声が聞こえる。
……はぁ。
「なぁ」
「なによ、その気になったかしら？」
「あー…、今更なんだが」
「どうしたの？」
「また会えて良かった」
「……」

「せめて何か言ってくれないか」
気恥ずかしくなってくるから。
「え、ええ。その、私も、また会えて嬉しいわよ」
「そっか」
「だから…」
「ん？」
いきなり真剣な顔になって。
「まぐわいましょう」
「いや」
「きゃう！？」
再会なんだから、デコピンで許してやる。

第十四話（前書き）

……進まない。
ヤミが出るまでがんばれ自分。
出来ればナナモモが出るところまでは……。

第十四話

春菜が目を覚ましたのは、放課後になり部活をしていた生徒が帰っていく時間になってからだった。
あの保険医は、カギを渡して戸締まりをするようにだけ言い残しさっさと帰っていった。

「まっすぐ家に向かうつもりだけど、どっか寄りたい所はあるか？」

「んー。ちょっと食材の買い出しに寄りたいかな」

「なら、商店街の方だな」

下駄箱で靴に履き替えながら、春菜に問いかける。
今の時間だと、どこが安くなってたっけ……。

「きゃっ！？」

「おお、大丈夫か？」

「う、うん。…ごめんね」

自分の足につまずいた気恥ずかしさがあるのか、消え入るような声。

「いや、謝られるほどじゃない。怪我した訳じゃないんだから」

「……ありがとう」

「おう」

そんな訳で、よく転ぶ春菜を置いて先に行くわけにもいかず、ただ今春菜の提案で手を繋いでの買い物中。
始めは顔を真っ赤にして後ろにいたのに、商店街に着く頃には慣れたのか引っ張るほどになっていた。
商店街の知り合いに、そこはかとなく温かい目で見られている気がする。

「久しぶりになるのかな？こんな風に二人で帰るの」

「あぁ、言われてみれば。ほとんどが四人だったからな」

「ほとんどでも、私以外との二人は多かったよね？」

そう言って、そっぽを向く春菜。
怒っているというより、拗ねているんだろう。
繋いだままの手は離す気がないほど握ったままだし。

「春菜は間が悪い時が多いからそうなっただけだ。別に蔑ろにしてないって」

「どうせ間が悪い女です～！」

さっき以上に拗ねて早足で歩き出した春菜にあわせて足を進める。
言葉の選択を間違ったか…。

「拗ねない拗ねない。このキャラメルをあげよう」

「拗ねてない！…でも貰う」

「ほら、こっち向いてあーん」

「あー、ん」

立ち止まり、素直に向いて口を開けた。
餌付けしている気がしてくるが、そんなことはない……はず。
手を繋いだままだから、片手で食べさせる。
慈愛に満ちた笑顔をした主婦がすれ違ったが気にしない。

「あ、おいしい。どこのメーカー？」

「自家製。最近、菓子作りに挑戦してな」

「うぅ、お菓子でも差がついてる……」

「春菜も腕が上がってきてるだろ。俺はすぐに追い抜かれる」

言って、歩き出そうとしたら手を引っ張られた。
振り返ると、真剣な顔の春菜と目が合った。

「すぐかどうかはわからないけど、絶対に追いつくよ」

だから、待っててね。
いつもより強い口調で春菜は宣言した。
……まぁ、あれだ。
子供に将来はお父さんみたいになると言われた親の心境、といえば近いだろうか。
いろいろな感情が交ざって、短く返事するしか出来なかった。

「ただいまー」

「おじゃましまーす」

買い物が恙無く終わり、帰ろうとしたところで春菜にお呼ばれした。なんでも、保健室に運んでくれたり買い物に付き合って貰ったお礼がしたいとのこと。

「お姉ちゃん？……いないのかな」

「秋穂さんなら、たぶん仕事だろ」

「そうなんだ。…あれ？　何でリトくんがお姉ちゃん知ってるの？」

「ああ、前に来たときに知り合ったんだ。ファッション雑誌の仕事だろ？　うちの母親も似たような事してるから、たまに相談受けてる」

付け足しておくと、相談だけじゃなく愚痴も聞かされているんだが。妹に弱い所を見られたくないんだろうけど、仕事終わりの時間に電話してくるのは勘弁して欲しい。

もういい大人なんだから、高校生に泣きつくなよ。

「そういえば、年下のコがどうとか言ってたような……」

考え込みだした春菜の背を押してリビングへ。

「よし！　お姉ちゃんを問いつめよう」

「待て春菜」

携帯電話を取り出した春菜の腕を掴んで止める。
流石に今の時間は仕事してるだろう。
……また愚痴を言われたくないからじゃないぞ。

「ほら、それよりも料理だ。おいしいの期待してるからな」

葛藤があったようで、数秒悩んでから顔を上げた。

「頑張って作ってくるから、楽しみにしててね」

笑顔で台所へ向かっていく春菜だが、後で聞き出そうと小声で言ったのは無視しよう。
すみません秋穂さん、あなたの妹さんは強かになりました。
今度差し入れしますから、深夜に電話しないでください。
窓から見える星に願ってみたが、まぁ叶わない願いだな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7187r/

始まりはいつも唐突で

2011年10月2日19時36分発行